

## 「信州男児」の歌について

丸山 隆平 (9組)

田舎(小諸)の兄嫁から便りが届いた。5年前に他界した母親の持ち物を整理していたら、私の子どものころの写真などが出てきたので送るとのこと。

その中から「上田高等学校歌の徒然草」という小冊子が出てきた。「上田高等学校創立60周年記念事業 同窓会館落成記念 社団法人上田高等学校同窓会発行(昭和39年4月19日発行)」とある。(写真参照)

先日、信州男児(健児)の歌について投稿したが、それについての丸山暢久君(4組)のコメントもあった。

冊子の最後に「信州男児」の歌についての解説があったので紹介する。



(前略) 現在我々が全く知らない歌でもある時期には盛んに謳われた歌もあるはずである。その一例をここにあげて、参考に供したい。

校歌の制定される以前、当時勃興途上にあつた日本軍国主義が帝政ロシアの極東政策と真正面から衝突しようとする重大危機に際しての日本の一般的風潮を、鹿児島出身、キッスイの九州男児田中常憲氏(当時国漢科)の気魄のこもった詞を佐久生まれの田口信太郎氏(音楽科・後山下と改姓)の力強い曲とによって歌い上げ、一時は“信濃の国”の姉弟の歌として非常に盛んに歌われ、その男性的なたくましさで県下を風靡した時期もあつたが、今はもう上田でさえも聞けなくなってしまった歌“信州男児”。明治35年に作詞され、翌36年に作曲されている。(後略)



これを読んでさらに納得した。私は「東信地方で歌われていた」と書き、暢久君は「北信でも歌われていた」と述べていたが、「“信濃の国”の姉弟の歌として非常に盛んに歌われ、その男性的なたくましさで県下を風靡した」とある。なるほど。

この歌を私は、小学校の運動会の騎馬戦の歌として記憶していた。運動会で女子は信濃の国に合わせダンスを披露する一方、男子の騎馬戦の行進の時の歌としてだ。

### 信州男児

- 1 東千山の嶮により 西万岳の雲によじ 六十余州の直中に 高く建てたる国一つ  
 函南の翼うちひろげ 見下ろす姿の雄々しさや
- 2 煙は高し浅間山 流れは通し千曲川 四時の野辺には花匂い 四季の山には月清し  
 天の眉目(かんばせ)地の姿 あな美しの国なれや
- 3 亡君の遺孤手に捧げ 雲なす大軍うちはらひ 誠忠孤剣を掲げて なにはの花と

散りにける 千古稀なる大傑士 幸村この地にそだちたり

- 4 維新の大業肩におひ 金鞍馬上鞭絶えず 魂西陸に行きかへり 文化の花をもたらせり 日本開花の卒先者 象山この地に生まれたり

5、6、7、8、9、10 略

- 11 奮え我が友我が健児 此の腕此の肝試しみん 二十世紀の戦場は はや我が前にひらけたり 信州男児に我ありと 見せて示さむ時は今

- 12 幸村去って三百年 象山逝いて百余年 偉人の叫びきかねども 蛟龍地にあり 九天の たけりや今に世に見せん 奮え我が友我が健児



浅間山、千曲川、幸村、象山、20 世紀——。

(平成 26 年 7 月 29 日記)

